

Title	<翻訳> 言語学と情報化社会
Author(s)	Mauro, T. De; 藤村, 昌昭
Citation	大阪外国語大学学報. 54 p.53-p.67
Issue Date	1981-10-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80858">https://hdl.handle.net/11094/80858</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 言語学と情報化社会

トゥッリオ・デ・マウロ  
藤 村 昌 昭 訳

本稿は、1980年10月15日に本学図書館において行なわれたデ・マウロ教授（ローマ大学）の講演“*Scienze del linguaggio e società nell'età della comunicazione di massa*”の翻訳であり、教授のプロフィールと講演の概要は学生部広報『ひろば』第63号に既収。

### § 0

この講演で、わたしは一つの問に答えてみたいと思います。言語と伝達（コミュニケーション）についての科学的な研究が、今日の《情報化社会》において何かに役立つものなのか、もしそうであれば、一体何に役立つのか、という問に対してです。

皆様も御存じのように、現在活躍中の言語学者のなかで、最も著名な人物は北アメリカのノーアム・チョムスキーでしょう。彼は自分の言語理論と社会的に重要な一応用部門、特に学校における語学教育との関係を問題として提起しました。しかし、彼は現場の教官たちとの会議で否定的な結論に達しています。つまり、言語学には応用可能な有効性がないのではないかと、でなくとも、少なくともチョムスキーの言語理論そのものが効力をもっていないのではないかと、という結論にです。

科学的な研究においては、仮説とデータが実用可能かどうかを即座に、しかも正確に判断するのは常に困難なことです。歴史を振り返ってみても、そこには粉々たる仮説が満ちあふれ、それらの仮説や理論はありとあらゆる方法で利用されたあと、長い時間を経て初めてその重要性が明らかにされる場合もあるのです。

北アメリカにみられるような実用指向（つまり、言語学による緻密な知識や理論を可能な限り実践に応用していく）文化にありがちな極端な楽観主義に対して、チョムスキーの場合は、ある程度の距離を保っている点でその正当性が認められます。

また一方、言語というものは、わたしたちの現実と心理的に、かつ社会的に、そしてもっと直接にかかわっているものです。だから、わたしたちが創り出す知識や理論のうちで、少なくともそのうちのいくつかは、現代社会の難解な変化を理解するための有効性をまったくもっていないなどということは考えられないことです。

わたしの考えている言語学とは、ただ専門家だけが理解し操縦するために有益な知識を創り出すものではなくて、少なくとも、わたしたちが生きているこの社会の変化を創り出す一面をもっているものなのです。そこで、わたしは（少なくともこのわたしにとって）特に有益と思われる考え方をいくつか示してみたいと思います。

## § 1

人間は他の動物と違い、社会に生きているだけではなく、社会がいかに作用し変化し、また変化しうののかを理解するために、方向を定めようと努力しています。しかも、最初から同じ方法ではなく、その時代と場所の違いに応じて、生きのびる必要性と自然の要求に対応しているのです。生態学的な表現でいえば、他の動物と同様に人間も《文化的動物》ということになります。それだけではなく、人間の場合はそれ以上に、量的にも質の面でも文化的に可能な限りの対応を理解するために、つまり、様々な文化がいかに創られ、いかに変化し、また変化しうののかを理解するために、方向を定めようと努力しているのです。要するに、人間は《メタ文化》の動物なのです。

わたしたちの世代にとって、この方向を定めるという問題は、ますます複雑化し、しかもますます拡大していく問題です。

特に過去数十年間に起った大きな出来事は、社会の組織や文化に対して方向を定めたり自問自答するという、人間の能力の限界を変えてしまいました。どのような事実があったかを具体的にみると、まず植民地化と帝国主義、貿易の拡大と輸送のスピードアップ、文書による情報の普及とこれらの情報の蓄積、電化と新エネルギー開発、そしてそのエネルギー輸送、従来の言葉を用いた印刷物以外の新しい技術を導入した通信伝達とその固定化、科学における新分野の開拓、千年ものあいだ読み書きまた責任のある批評を加えるということには無縁の存在であった広範囲の人間に対する学問の普及、同一人種であることと同時に、その人種内部において同一階級にあることを証明しようとする世界的な傾向とその必要性、多国籍的結合に対する願望と可能性と必要性。いま触れたこれらの出来事は、だいたい年代順に並べたつもりです。

これらの事実によって、今日の社会・国家・文化は、自分自身に対してだけではなく、同時に他の社会や国家や文化に対しても問いかける必要に迫られているし、またそうすることを余儀なくされています。つまり、過去にはなかったような非常に数多い選択の可能性をもっているといえるのです。

先ほど、方向決定の問題はますます拡大しつつあると述べましたが、これは見逃してはならないことです。社会や文化に対する問いかけは過去においてもなされましたが、それは洋の東西を問わず、ごく限られた一部の知識〈エリート〉のあいだにだけ流布していたにすぎないのです。19世紀以降、これらの問いかけはますます<sup>マス</sup>集団の問題となってきました。社会というものがどの程

度まで自由で、かつその社会自身に対して責任をもっているのか。どの程度まで民主的なのか。さらにわたしたちは、これらの疑問が、すべての市民とすべての社会的集団<sup>グループ</sup>によって、実際の程度まで正確に分ちあわれているのか、ということも推し量ることができるのです。

様々な政策を掲げる複数の集団（階級、政党、候補者）を選択する機会を提供している政治選挙があるということは、そしてまた、実際にはそれ以上の数の政治団体が存在するということは、確かに民主主義の段階を知る上での重要な《指針》といえます。しかし、この二つの重要な指針には、少し前に触れたもう一つ別の指針を加える必要があるでしょう。つまり数多くの選択（様々な方針を示唆している政治や宗教の諸団体）を提供されている側の人間は、これらの選択の可能性のなかでどの程度まで方向を定めることができるのか、という問題です。

異なった様々な意見をもつ数多くの新聞雑誌があります。そのことは確かに大切なことで、表現の自由がある証拠なのです。しかしながら、一体誰のための自由なのでしょう。新聞や雑誌を書く人のためなのか、それを読む一般の人のためでもあるのか。いいかえれば、出版の自由が認められている社会において、一体どれだけの人がこの自由を行使できる状態にあり、しかもこれらの多種多様な新聞雑誌を読んで理解し、かつ正しい評価を下せる状態にあるのか、ということです。

政党や宗教団体などについても同じことがいえます。いくつもの集団があるということは、民主主義を推し量る一つの重要な指針なのです。しかし、どれだけの人間が、政治や宗教の〈指導者〉<sup>リーダー</sup>たちの言っていること（実際は《言っていない》場合が多いのですが）を理解できる状態にあるのでしょうか。

このように、現代の巨大な社会や文化や集団生活の節<sup>ふし</sup>ともいえる根本的な問題を省みることによって、わたしたちは純粹に言葉そのものを問題として提起する段階に到達するのです。つまり、どれだけの人間がその言葉を話したり書いたりすることができ、またどれだけの人間がその言葉を理解できるのか、という問題です。

わたしの国イタリアについて、具体的な例をあげてみることにします。イギリスの学者パーシー・アラムは、イタリアの出版物にみられるバラエティーに富んだ政治方針と、そこで展開されている政治討論の水準の高さを絶賛しています。イタリア人はアラムに感謝すべきなのでしょうが、もう少し冷静に考えてみる必要があります。成人の男女のうち、その34%は何の学歴も有していない、つまり学校へは一度も行っただけの人が、仮に行っただとしても最初の数年間だけであとが続かなかった人たちで、44%が、5年間の学校教育を受けて小学校だけは何とか卒業した人たちで、残りのたった22%が、中卒（このなかには高卒、大卒も含まれる）、つまり最低8年間の学校教育を受けた人たちなのです。

イタリアの学識経験者の多くは、このデータを快く思っていないし、そのことには触れたがりません。それに、このデータを問題にする者を快く思っていないのも事実です。気持はわかりますが、このデータは、イタリア人の $\frac{1}{3}$ は出版の自由を十分に活せない状態にあり、 $\frac{1}{6}$ は新聞な

どを一字ずつ読めはしても、アラムが絶賛しているような高い水準の政治討論を十分に把握できないでいることを意味しているのです。確かに、このことがただちに、イタリア人の $\frac{1}{2}$ が政治に対して問題意識をもてず、責任ある方法でその問題を解決することができない、という意味ではありません。しかし、種々雑多な政党や新聞雑誌を提供している国家は、男女を問わず国民の一人一人がこの出版の自由を実りあるものにできるよう、十分な手だてを施さなかったし、今もしていません。では、イタリアという国は民主的な国家だといえるのでしょうか。この種の質問に対しては、ただ単にイエスとかノーではなく、段階を追って答える必要があるでしょう。しかし、ここでは社会という問題を具体的な例をあげて論じることによって、言葉の問題をどの程度まで論じることができるのか、また逆にできないのかを提示することに焦点を絞りたいと思います。

しかしながら、いま述べたことは特殊なケースにすぎません。普通の場合、人間が歴史を通して形成し体験してきた社会や文化の現実に対する反映（あえていうなら、社会や文化との絶え間ない深いかわり）は、どんな場合でも常に言葉の十字路にたどり着くもののなのです。普通これを獲得するためには、言葉に関するいくつかの定説を単に要約するだけでは何の役にもたないのです。ただこと伝達（コミュニケーション）に関していえば、社会的な見地からみて、一般的にもっと重要な目的に対してなら少しは役立つかもしれません。

## § 2

言葉全体を問題にするにあたり、イタリア語の *linguaggio* という単語と共通している英語の *language* とフランス語の *langage* という単語をここで取り上げることにしましょう。現代英語には単語は一つしかありませんが、イタリア語とフランス語には共通した一対の単語が存在します。つまり、イタリア語の *linguaggio* と *lingua* に対するフランス語の *langage* と *langue* がそれぞれです。最初にあげた *linguaggio* と *langage* には接尾辞が付いていますが、これは *nomen actionis*（つまり、言葉を用いる能力を意味するもの）で、あとにあげた *lingua* と *langue* は、ある一定の時代に一定の人々が用いた言葉と方則の総称です。

近代言語理論は、今世紀の初めにフランスの偉大な学者ソシュール（1916年に発表された『一般言語学講義』）と共にスタートを切ったのですが、それはまさに、いま述べた現代イタリア語とフランス語における用法上の区別を説いたもののなのです。今日では、先ほどあげた二種類の単語は正確に区別されるもので、まず *linguaggio* と *langage*（また他の言語においてこれに対応する単語）は、言語記号を用いる人間の能力として理解され、また *lingua* と *langue* は、言語記号によって秩序をもつ個々の言葉の総称として理解されています。

この区別から出発することによって、別の区別が可能になってきます、それらの区別を、§ 1の終りで触れた言葉と伝達に関する定説を導入しながら簡単に述べることにしましょう。

*linguaggio* は〈コミュニケーション〉と同義語で、〈コミュニケーションのコード〉(もしくは

〈記号学的コード〉)を利用することによって、情報を通信・伝達する能力（これは人間だけに限らない）をいいます。これらの〈コード〉は、通信・伝達的手段と方則の総称であり、一般に〈記号〉と呼ばれているもので、外面的な〈記号表現<sup>シニフィアン</sup>〉と内面的な〈記号内容<sup>シニフィエ</sup>〉とから成っています。個人と個人とのあいだでの具体的な意志の伝達は、これらの記号を通して言語能力を活用し、特定のコードを用いることによって可能となるわけです。この〈具体的で個人的な活動〉には、通信・伝達の世界の一般方則に準じた特別な名称はありません。しかし、これから検討していくように、この間隙（欠如）には意味がないというわけではないのです。

以上に述べたごく一般的な区別は、あらゆる形態の伝達を目的とした〈記号学的〉な活動にとつて有効なもので、それに対して、話すというのはそのうちの特殊な一つのケースにすぎないのです。話す場合には、最も一般的な記号学的区別に則って、次のように分けられます。

まずラテン語の*verbum*（ことば）に由来する*linguaggio verbale*ですが、これは、不特定多数の言語と言葉を修得して使用するような場合に、すべての人間が種々雑多な特徴で受け継いでいる能力をいい、この能力は普通、音声を出すことによって、つまり、〈口頭の〉*linguaggio verbale*として呈示されるものです。ところが、紀元前3000年からは、銘記するための言語記号を固定しようとする動きがますます盛んになり、それゆえ*linguaggio verbale*は、徐々に〈グラフィック〉な〈文語〉の*linguaggio verbale*をも表わすようになります。

次に〈言語<sup>ラング</sup>〉ですが、これはある一定の期間に、歴史的に単一の共同体独自に認められる言葉と用法の遺産ともいえるものの総称です。

次に〈言語記号〉ですが、これは言葉であり、慣用的な言葉の集合、つまり〈句〉とか〈フレーズ〉と呼ばれる一言語に特有な言葉と句の組み合わせをいいます。

最後に〈パロール〉ですが、これはソシュールが『講義』のなかで用いたもので、フランス語に限らず数多くの言語学者たちが専門用語として広く用いているフランス語の女性名詞です。今日ではフランス語においても専門用語として用いられるこの現代フランス語の〈パロール〉は、個々の人間の表現、つまり理解したりさせたり、また言葉を捜し求めながら自分自身を正当化させるための、個々の人間の具体的な活動を意味するものです。

一般に受け入れられているこのような理論的な用語上の区別から出発して、次に問題とすべき言葉とコミュニケーションの一般的な学説を提示することにしましょう。

### § 3

現代言語学が、人間、社会、文化、歴史の現実と*linguaggio verbale*との関連性を理解するために、わたしたちにとって有益なものとして教示したものを、いくつかの一般的な公式のなかに要約することは可能で、7項目に分けられると思います。

- (1) 〈*linguaggio verbale*は生物学的にみて文化的なものである〉、他の動物に特有の言語能力

と較べても、また人間が備えている他の言語形態の能力（標識、信号、目録、分類、計算、等々）と較べても、*linguaggio verbale*は自然や社会と同じ程度に、生物学的で歴史的な自然の混合物から出来ているのがその特徴です。この点では、チョムスキーも、そして話す能力、つまり *linguaggio* の生物学的で先天的な特徴を強調する学者たちも正しいといえます。ところが、チョムスキーに近い生物学者のレンネベルクは、わたしたちに一つの事実を見事に実証してみせました。彼によれば、人間の特徴である先天的な他の能力に較べて、*linguaggio* は活動し飛翔するもので、(精神的な衝撃や病理的な状態を別にすれば) 個々の人間の遺産として残るものなのですが、その際に考慮すべき条件というのは、(心理・生理学でいうところの) 閾<sup>いき</sup>だけであり、この境界線のようなものは7才から8才の時期に置かれていると考えてよく、個人はこの閾に達するまでに、家族や社会といった集団の相互作用のなかで完成されているかどうかが問題となってくる。そして、この閾を越えてしまった段階では、臨床実験によるいくつかのケースや捨て子の場合でなくとも、とにかく人間の集団に属さないで育った子供のケースなどは、言語能力というものがもはや習得可能なものでないことを教示してくれています。この閾の存在は、一方では *linguaggio verbale* の生物学的に根深い定着力を実証するもので、つまり、この *linguaggio verbale* というものは、ただ単に教え込んでも、また生物学的に定義づけられた一つの閾を越えたところでは、社会的な通念に従ってどのような手段を講じても、修得可能なものではないのです。逆にいうと、それ自身、社会的な関係（一定の人間との文化的といえる関係）がないところでは、この人間の生物学的な遺産は活動しないということにもなるわけです。つまり、*linguaggio verbale*は、必然的に社会的なものであり、従って、必然的に歴史的なものと定義づけることのできる遺伝的な遺産なのです。

(Ⅱ) 〈言語は本質的に社会的なものである〉。人間の共同体が利用している他のコードも、それぞれ社会的な起源をもっています。最も洗練された計算や表象のためでさえも、1930年代以降の《主題のない》論理はありえない、という定理は役立っているものであり、利用者や〈実用的〉な次元をもっていなければ、論理的な数学の計算もシンタックスもありえないのです。10進法や2進法も、元を正せば実用的で正確な順番を社会が要求したからです。幾可学<sup>ジェオメトリア</sup>は、その名称自身に、測量<sup>ジェオメトリア</sup>（土地十寸法）という実用的な刺激の面影を残しています。この測量ということが最初の推進力になったのです。従って、他のコードや言語能力も、同様に〈社会的〉なものといえるでしょう。言語が他のコードと異なる点は、その言語の社会性が急進的な状態にあり、しかも絶え間なく蘇生していることです。別のタイプの標識、信号、目録、計算といったコードは、新しく生まれ、一般に認められ、そして定義づけられる、といった具合に、移り変る社会に対して可能な範囲で引き合いに出されるものです。ピタゴラスの定理は、ピタゴラスにとっても、わたしたちと同等の価値があったのです。仮に、ある一つのコードが人間を満足させるものでなくなれば、そのコードはおろそかにされるか、多くの場合は別の方式に取って代られます。（基本的にはアルファベットの I. V. X. C. D. M からなる）ローマ数字の方式は、徐々に見捨てられ、(O.

1. 2. 3……9 から成る) アラビア数字の命数法に取って代られたのです。これらの二つの方式の間には連続性はなく、質の飛躍があるだけです。これらに対して時間は過ぎますが、それはその外部においてのことなのです。これに対して言語の場合は、ラテン語が世代を経て、(古い形態に忠実な水準ではなく) ある程度の社会水準で、口語のネオ・ラテン語からロマンス語に〈成る〉。ちょうど、ブラウトゥスのラテン語がカエサルやホラティウス等のラテン語に〈成っていった〉ように。時間(通時性)は言語の〈外部〉にあるものではなくて、その〈内部〉にあるのです。つまり言語は、社会の変遷や時間によって限定されたかなり強力な変化を通して、それ自身の正体を保持するために創られたものなのです。本質的に社会的で時間的なもの、というこの言語の特色は、特定の言語における言語記号の可能性に目を向ければ明らかなことです。

(Ⅲ) 〈言語記号は本質的に社会的で時間的なものである〉、分類や計算といった方法を採用する人は、これらの単位の組み合わせの基礎となり方則となっている同一の単位だけを、しかもそれらをすべて準備しなければなりません。これらとは別の種類の単位や方則を採用する人は、分類と計算の外側に置かれることになるのです。理論家たちが計算の可能性について教示したように、計算は(言語とは異なった記号学的コードの一般方則にとっては価値のあるものですが)〈非創造的〉なものなのです。

逆に言語においては、言語そのものが揺れ動いています。たとえば、フランス語が通じるとか、イタリア語が通じるとか、また、この人はフランス語圏の人だとか、イタリア語圏の人だとかいいますが、実際のところ、これらの二つの言語間には、語彙や用法やシンタックスについても、さらに言語のなかで最も固定的で非創造的な部分と考えられる音韻や形態に関しても、非常に大きな違いがあるのです。数字とか数字のようなシンボルを特徴づけるためには、その意味と統語の特徴を指摘する必要がありますが、またそれだけで十分なのです。つまり、それがどういう意味であり、他のどのような単位と組み合わせることができるのか、そして意味的な価値と統語的な数値の間にはどのような相互作用があるのか、ということを指摘しさえすればよいのです。(例えば、こう考えてみればよいでしょう。割り算の答えを整数にしたければ、除数は割られる数の約数以外ではありえない)。言語の場合にはこれとまったく正反対のことが、その単語と句で生じてきます。「*tabagista* (ニコチン中毒)」、「*fumatore accanito* (ヘビースモーカー)」、「*ciccarolo* (シケモク拾い)」、「*tossicodipendente* (麻薬常用者)」、「*drogato* (麻薬患者)」、「*comunista* (共産党員)」、「*rosso* (アカ)」、「*picci-otto* (PCIシンパ)」、「*berlingueriano* (ベルリンゲル派)」、「*assumere, prendere, pigliare, afferrare, acchiappare, acciuffare* (すべて、取るとか掴むといった意味)」)。ここにあげたのは、すべてイタリア語の単語で、意味とか統語上の単なる特徴は、実際にどのように用い、また用いることができるのか、という問題に対しては何の正当性も与えてくれません。これらの特徴を明確に定義づけることはできませんが、専門的な用語に属しているものとか、一般的な言い方であるとか、また特殊なグループで使われるもの、というぐらいの区別はできるでしょう。これらの単語のうちのいくつかを知らなくても、それで厄介なことにな



るというわけでもなく、立派にイタリア語が話されているのです。話者の慣用、もっと正確に言えば、各々の社会的地位とその社会の変遷、そしてさらにその時の気分をもっている話者は、それぞれの言語記号を特徴づけている秩序と同時に無秩序のなかに身を置いているのです。

(Ⅳ) 〈言語記号の場合、その実現(パロール)は、ただ単にそれを執行するだけではなく、それを構成するものである〉。言語記号を個人が用いる場合、その価値やシンタックスは修正されたり、思いがけない方法で並べられたり、またピリオドが限定されたりします。〈パロール〉とは、つまり、他のコミュニケーションのコード記号を用いることによって容易に実現できるようなものではないのです。他のコードにおける実現は、秩序をもった公式的で明確な価値を損なうことなく実行されます。逆に言語においては、個人が記号を用いることによって実現されるのですが、そこでは記号を生かすことも殺すこともできるのです。従って、〈パロール〉というのは、記号学的な他のコードと較べて、例外的ともいえる重要性をもつもので、それは言語の創造性を証明し、それ自身が強大な創造力をもっていると同時に、記号を構成しているものなのです。だから、それが共通の場で用いられるような場合、別の表現形式で記号を個人的に使用する機会を選定しようと思えば、専門用語を新しく造らなければならないのです。*linguaggio verbale*の場合は、どの言語においても語彙は豊富です。例えば、前にあげた〈パロール〉というフランス語の単語を例に取ってみても、専門用語としての意味は、イタリア語の *espressione* (表現) だけではなく *stile* (文体) にもあたり、他の言語においてもそれぞれ同じような意味をもつ言葉があります。言語を口に出す方法は、そのこと自体、本質的に社会的で個人的なものなのですから、それは、一人の人間が自分の生きている社会、時代、歴史性、そして自分自身の根底に存在しているものを口にする方法の総体を意味するものなのです。そこから、《文は人なり》と定義づけることも可能だし、聖書からは、言葉は人間一人一人の心のなかにその根元がある、が想起こそされるでしょう。

(Ⅴ) 〈言語を所有していることは、人間一人一人に対して、人間と人間が生きている社会環境、人間の過去と未来、人間の経験、人間自身の存在、またそれらの間の相互作用とそれに関する概念、といったものを整理するための最も強大な力の所有を保証している〉。他のコードにおいては、表現可能な物の範囲は限定されているし、また限定できるものですが、言語記号で表現できる物の範囲については、〈先験的に〉<sup>アフリオリ</sup>指摘できるような限界を定めるわけにはいきません。そこには物の<sup>カテゴリー</sup>範囲もなければ、言語記号そのものの基準のなかで意味をもちえない、とあらかじめ言えるような現実性の基準<sup>リアリティー</sup>もありません。一つ一つのフレーズや言葉の意味を拡大しようとする力は、他のコードにおいては普通みられない自己基準という限界にぶつかります。言葉はそれ自身を定める〈自制・自律〉と、それ自身を語る〈反省・内省〉をもっているのです。言語というものは、それ自身と他のあらゆる言語とのメタ言語として用いることができるのです。このように、言葉はその意味(つまり意味的な規約)を改良したり限定するために、わたしたちが言葉そのものに対してなすことのできる(また実際にそうしている)自己批判の世界へ、わたしたちを連れて行くのです。

(Ⅵ) 〈言語は人間社会を構成するものである〉. 人間の社会は次のように組織されうるといえます。まず、それ自身のアイデンティティーを損なわない程度に変化することのできる社会として。また、静止することなく時間を通じて持続することのできる社会として。最後に、各々の社会の構成分子が、自分たちの言語である言葉や意味の遺産のなかに、またそれを手段として、自分たち自身と自分たちの経験や記憶を再発見することのできる社会として。だからこそ、19世紀のフランドルの詩人ルニエからシチリアの詩人ブッティータに至るまで、幾度となく繰り返して言われてきたように、《言語は虐げられた人民の戦旗であり》自分たちの言語と心の奥底から湧上る声を失う時、民衆はまさに《貧民と奴隷》に成り下ってしまうのです。また、かつてのマルクス主義者たちの言語構造（あるいは上部構造）の特徴に関するジレンマから解放されて、言語のなかに一つの新しい要素を認める必要があるのです。これは拭い去ることのできないもので、アイデンティティーと歴史の能力を備えて存続する社会のなかに、人間の集団を完成させて行く上で必要な要素なのです。

(Ⅶ) 〈言語性は人間全体のアイデンティティーを構成するものである〉. 言語において、またその言語を使う場合、人間は自分と自分を取り巻く文化との関係、自分が生きている社会区分との関係、また自分の時代や歴史性との関係を、その言語を飛び越えたり変形させることによって明確なものにしていくのです。ヴィーン学団の偉大な哲学者ヴィトゲンシュタインは、「《苦痛》という〈概念〉を、君は君自身の言語で学んだのだ」(『哲学探究』, § 383)と書いています。この自分自身という概念や、自分自身を社会・文化・歴史的に位置づけるという考え方は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』のなかで、言語性、つまり《詭弁》によって人間のなかに形成される社会的な《交渉》と呼んだものに等しいのです。

#### § 4

以上にあげた7項目が何らかの正当性をもっているとするれば、また最初に展開された見解が正当性をもつとするれば、わたしたちは自分が話している言語とその能力に対して、またわたしたちが利用している言葉に対して、科学的で批判的な自覚（意識）をもたないかぎり、この世におけるわたしたちの生き方を理解したいと願ってみたところで、それは無理なことなのです。言葉という歴史的な偶然性を乗り越えて、予測するだけでまだ手も触れられたことのない本質のなかで、物事や習慣や超絶的で難解な他の現実を達成したいと思うのは、自分自身の影を自らの手で奪おうとしたペーター・シュレミールの願いと同じことなのです。ペーター・シュレミールというのは、ドイツのロマン主義作家シャミッソーの童話に登場する主人公の名前です。

今世紀の前半に入って、人間世界の様々な局面における言語活動の中心を、なお一層明確に検討しようとする科学的考察が前面に出てきます。最初は心理学と深層心理の分析（ヴィゴツキーのソヴィエト学派、ピアジェ、フロイト、ユング）、次に科学的な論理学（バシュラル、ラッセ

ル、ヴィトゲンシュタイン、カールナプ、ポPPER),そして最後に文化論(北米, ドイツ, ソ連といった国の人類学者たちによる研究成果)。

ところが、経験主義的な理論社会学や、政治・社会史学などにとって、この《言語学の転機》は容易に理解できるものではありませんでした。社会学の世界においては、バーンスタインのように一般社会学から言語社会学(もしくは社会言語学)に転向したケースは珍しい。社会言語学という、この新しい研究部門が生まれた経緯をうやむやにしていけません。この新分野の研究者たちは、社会学の次元に注意を傾ける言語学者であり、その逆の、つまり、言語学的事実の重要性に注意を払っていた社会学者が、最終的にそれに屈したということではないのです。

## § 5

言語とその用法を考察すれば、現代の社会・文化の特徴である速度を増す動き全体を、特権的ともいえる中心点から観察できるのです。討論に刺激を与えるために、現代言語学を特徴づけているいくつかの傾向を、仮説を用いてあげてみることにしましょう。

(1) 二つ以上の言語を使える人間は、遠い昔から存在しています。日本から地中海に至るまで、古代帝国の役人や特権階級の僧侶たちは、慣例として二つ三つの言語を使っていました。西洋においても何世紀ものあいだ、共和制ローマや帝制ローマの知識人や政治家が、二つの言語を用いるのはあたりまえのことでした。中世から近世の初めにかけて、知識人であるための必須の条件は、ラテン語とゲルマン語、アラビア語とロマンス語、ラテン語とロマンス語、ヘブライ語とロマンス語、ギリシャ語とスラヴ語、といったふうに二つの言語を使いこなせることでした。植民地化、帝国主義、移民、貿易の激化といった現象は、すでに19世紀からのもので、これらのことが、以前にも増して大きなスケールで、しかも文化的に高い水準にある特定の知識人の枠を越えて、二つ以上の言語を知っているという必要性をもたらしたのです。そして今世紀に入ると、すべての国で複数の言語を使える人間の数が大幅に増えました。今日では、複数の言語使用、つまり自分の母国語以外に一つか二つ別の言語を知っていると、また少なくとも理解して使えるということは、どこの国においても一種の義務のようなものなのです。少なくとも小学校以上の教育を受けた人が、英語についての何らかの知識、また英語とはかなり程度は違うが、フランス語についての何らかの知識をもっていないような国はないでしょう。報道機関、情報機関、先進的な科学技術畑、商取引の世界、旅行業界といった職場で働く人たちは、自分の母国語とは異なる英語やその他の言語で書かれたテキスト、記録、資料、カタログ等と毎日のように接しているのです。今や特定の指導階級や知識人階級のためだけではなく、ある程度の文化水準で教育を受けた集団は世界的な規模で拡大され、それはさながら《バベル》の様相を呈しています。旧約聖書によると、このバベルで、神は人間に種々雑多な言語を話すようにしむけたのです。

(2) ユーザーたちの複数言語使用は、唯一のものではないにしろ、確かに一つの理由による

ものです。つまり、現在使用されている特定の言語が、世界の隅々にまで浸透しているという理由からです。この現象自体も、新しいとは思えないものです。シュハルトからメイエ、バイイに至るまで、最も偉大な言語学者たちは、世界の主要言語が国家主義や民族主義にもかかわらず、互いに折り重なってどの言語も《<sup>ミッシェル・シュプラー</sup>雑種言語》を形成し、一人の人間が自分は母国語だけを話していると思っ<sup>ミッシェル・シュプラー</sup>ていても、自分でも気が付かないうちに外国の言葉を話してしまっている、という状況を指摘しています。しかし、今日の外来語や言語の複写（つまり、ある一つの言語的な習慣から別の習慣へと推移する）という現象には、これまでとは違った深さと広がり<sup>ミッシェル・シュプラー</sup>と一般性が認められます。世界中の言語に入り込んでいる外来語は、主に英語からのものですが、注意深く観察すれば、外来語という形態が一般にはあまりわからない複写の形態かの差こそあれ、英語は英語で、種々雑多な言語に由来する言葉を吸収し、それを再び放出しているのです。

世界中の伝統主義者たちは、サンスクリットからラテン語やギリシャ語に至るまで、過去の偉大な言語に対する研究が低落していることを嘆いています。しかしながら、言語学者というものは、矛盾する動きの有様を、もっと冷静に観察するものなのです。確かに、ギリシャ語やラテン語に通じているものは、かつてヨーロッパ社会で占めていた特権的な地位を失ってしまいました。それに、ギリシャ語とラテン語だけの知識では、現代文化のなかではあまり重要な意味をもたないことも事実です。しかし、別の事実にも目を向けてみましょう。つまり、少しあとでもう一度問題にする科学的な言語活動についてです。ここでは詳しく触れないでおきますが、それでも、一般教育の普及が、ギリシャ語やラテン語の単語と、さらにラテン語の原典とさえ接触する機会をもたらしたことは言うおくべきでしょう。このことは、ヨーロッパに限らず、種々雑多な言語を用いる広範囲の人々についてもいえることで、歴史上はじめてのことといえます。死語とな<sup>ミッシェル・シュプラー</sup>ってしまった古代の言語と現代語とが同じ場所に共存し、社会のなかで同程度に拡大された基盤をもつというようなことは、これまで一度もなかったことです。

（3）二世紀前までは、学問的に科学的に文化水準の高い知識人層をもつ国民が話す少数の言語の内部には、最も一般的に使われている単語と並んで、一定の広がりをもつ一連の術語が存在していました。つまり、神学、論理学、算術、幾何学、医学、といった専門的な技術の分野で使われる用語のことです。労働を社会的に分割するということは、それ自体をさらに詭弁を用いた複雑なものにしてしまいましたが、職業や職務を表わす術語だけは、多くの国において膨大な数にのぼっています。また、どの仕事でも、拡大された個有の単語をもっているか、一般に使われている単語の特殊な用法をもっています。それから、財産を細分化することと密接な関係にあることですが、科学的な研究分野がますます増加し分岐していく傾向がみられます。そしてこの分岐が、きのうまでは慣例的に論文の一章にすぎなかったところに、ぶどうの房ほどの様々な科学を誘発したのです。本題から離れてあまり遠くへ行かないためにも、きのうまでは痩せこけた章にすぎなかったものが、具体的にいえば、ソシュールの『一般言語学講義』の§にすぎなかったものが、科学の独立した一分野となり、その論題だけを取り扱った専門誌が10冊近くあるという事

実を述べるだけにとどめておきましょう。ただ、この種の現象は、科学のどの部門にも共通していえることなのです。

一つの新しい科学の分岐、分裂、完成という動きは、これまでとは違った新しい方法で用いられる何千という複雑な専門用語を造り出す原動力となるものです。化学ひとつだけを例にとってみても、その数は実に何十万にものぼるのです。ギリシャ語とラテン語は、これから先も、様々な科学の専門用語を掘り出すための鉱山であり続けるし、それにこの鉱山には無尽蔵の原石が埋まっているのです。今日広く使われている単語を基礎にして、新しい職業や科学のうちのひとつと結びつけられた専門用語だけでも、かなりの量に達しているのですから、全体では量りしれないほどです。

(4) 過去30年間における教育の普及と、視覚に訴えたり口頭で伝えたり文章で伝えたりする情報の普及は、専門的な言語の能力を広めるために、質的にみてもまったく新しい状況を創り出しました。積極的にでも消極的にでも、互いに価値を認めあえる要因と局面とが錯綜するなかで、技術や科学に個有の言語は、これから先も毎日のように、一般大衆の膨大な量の読み物や話の渦のなかに注ぎ込まれるのです。多くの国で次から次へと熱狂的に起こっているモードの文化は、多くの異なった専門的な言語を何度も混ぜ合わせた結果できる表面の泡にすぎないのです。

(5) 最後に、大きく変る可能性をもっていることで特徴づけられているすべての社会において、〈辺境の集中化〉現象という、その名称自体が矛盾している現象に出会います。下層階級の人間が、自分たちにだけ通じる言葉や熟語を用いるというのは、いつの世にもあることです。しかし、これまでは雲の上の話でしたが、現在は、マス・メディアの思いがけない強烈なヘッドライトに輝らし出されているのです。どんな廃村でも、きのうまではゲッターのように孤立していたどんな集団でも、言語学の少数派やトラピスト修道院の修道士でも、漁師の集りや駅にたむろする乞食たちでも、移民やどこかの運河の船頭でも、マフィアや売春婦の組織でも、へんぴな所にある大学で教鞭をとる教授や山奥の禅寺で修業に励む禅僧でも、いつなんどき、国内向けの、あるいは海外にも放送されるテレビの電波に乗ってブラウン管に映し出されるかもしれないのです。つまり、きのうまではごく少数のあいだでしか通じなかった内緒言葉が、次の日には三つ四つの大陸で、すべての人々が口にしているかもしれないのです。

これらの五つの傾向は共存しているもので、その点で過去とは非常に異った状況を創り出しています。数多くの言語と、特殊な言語の能力から生まれた数多くの専門用語を知っている人間の数が、かなり増えたことは事実です。それゆえ、毎日耳にしたり目にする専門用語の圧力は、過去の歴史では見られなかったほど巨大なものになりました。こうした現象は、多少の違いこそあれ、世界中で起こっていることです。いたるところで、しかも誰もがみな、日常生活のなかで不可解な単語に不意に出くわす可能性は非常に大きいといえます。このわたしの講演がそうでなければよいのですが。

§ 6

本質的にも新しい何かが浮び上ってきていることは、前の章の最後のところで少し触れました。社会から孤立した生活においてではなく、その日その日に造られる物のなかには、様々な言語形態の群れが拡大されて存在していますが、その結果、毎日の生活そのもののなかに、また毎日必要とするもののなかに、しかも異なった位置において、言語的には自分自身と異質に交差している数多くの流れを、うまく切抜ける人間と切り抜けれない人間を生むことになるのです。

これも新しい事実ではないかもしれません。このような孤立の例はたくさんありますが、歴史のなかでは、進歩的な知識人は常にこの孤立の状態に置かれてきたのです。例えば、理解して利用できる語彙の豊富さに焦点をあてて、当時の学識ある〈指導者〉たちと、彼らと共に生きた一般の人間とのあいだの距離を、仮にメジャーのようなもので測定できるとして、それを今日における両者の距離と比較してみれば疑問の余地はないと思います。今の大学において簡単な教育を受けただけでもある程度は学識をもっているといえるグループと、やはりこれも一応の教育を受けているその国全体の人間とを結びつけているものよりは、かつての〈エリート〉と一般の人間とのあいだの言語的な（従ってその根底においては文化的でもある）連帯の方が、はるかに強かったのです。さらに、個人と団体の日常生活における知識の水準は、産業革命以前の社会では知られていなかった極限に触れることにもなったのです。

しかしながら、現実というのは、もっと複雑なものなのです。学校制度が発達している国、つまり少なくとも資本主義の国では（残念ながら、東欧の社会主義圏については、どのようなデータが出ているのかわからないのですが）、最も高度な教育を受けた大部分の人間は、大人になって小学校四年生と同じ程度のレベルまで知識が後退してしまうのです。そして非常に高い割合（例えば、イギリスでは高等教育を受けたうち百万人を越える人間）で、まったく文盲同然の状態にまで落ちてしまうのです。

一方では〈エリート〉は今までになかった言語的知識の蓄積を迫られていますが、逆に、教育を受けていながらも、大部分の人間は文語文化に対する無関心、という過去の歴史的状況へ再び追いやられているのです。

複雑化のもう一つの要因は、何億という数の人間が完全な文盲の状態のままでいることです。この人たちは大人になって文盲に戻ったのでもなく、また使い捨てとか労働の細分化といった社会の生活様式によってそうさせられているのでもなく、つまり、学校教育というものが掠<sup>かす</sup>りもしなかった人たちなのです。完全な文盲は特に、アフリカ、南アメリカ、東南アジアに集中していますが、その数は10億に達します。

ヨーロッパにおいては南部の半島部に多く見られ、イタリアでは大人の1/3がそうで、そのうちでも特に女性に多いのです。

このような亀裂を前にして、政治的な指導階級や、さらにもっと大きな集団は様々な誘惑にか

られました。

最初は、進歩的な科学や技術を破壊したり、都会の社会ではなく田園における農業社会への後退を試みることです。しかし、忘れてならないのは、何十億という人間の変死は、このような手段を講じる状況から生じたものだということです。

次に、政府が科学の発達と科学的な知識の普及に歯止めをかけようとする動きです。これは、ハックスリーが『みごとな新世界』のなかで描いた解決策です。この本も今ではすっかり忘れ去られていますが、この作品のなかで想像されている未来社会は、世界は唯一の社会から成り、その社会は慎重に計画を練った上で選び抜かれた《アルファ・プラス(最高級)》というごく一部の集団によって指導され、科学技術に関する知識は、この集団だけが自由に利用できるように集中化され、それによって他の社会階級が支配されるのです。しかし、このような考え方は、存続のために創造力を駆使して社会を変えていこうという人間本来の能力を、無理やり殺すような体制を創り出して、今日の亀裂を合理化しようとする危険な策なのです。

## § 7

言語文化に関する問題は、今や社会的に悲劇ともいえる状態にあり、この問題を積極的に解決しようと思えば、純粋に言語学的な領域だけでは不可能なことなのです。

現代社会の内部に、文化的で言語的な結束力をもった状態を再建することは可能なことなのだろうか。またどのようにすれば、科学的で進歩的な知識文化の遺産を破壊することなく、しかも自由に動きまわられる人間の（歴史的に見て決定的な）能力を殺すこともなく、そのような状態を再建できるのだろうか。そう自分自身に問いかけてみると、その答えは、現代社会の生産的な土台になっているものを今一度よく考え、それを変えていだけしかないのです。生産過程におけるオートメーション化を減少させ、できるだけ多くの人間が、社会と労働と文化の空間のなかを自由に動きまわられる能力を増し、文化に対する適性という言葉をもっと広い意味に解し、その適性を再び自分のものにして適応していくための場所を増すこと。この方法にそっていけば、過去に戻りすることもなく、民主的な生活の抑圧もなしに、分岐によって引き裂かれた現代文化の生地をもう一度織り上げる可能性が見つけられるのではないのでしょうか。

しかし、このような手段がうまく講じられたとしても、科学的な知識文化を治める集団の、その壊れやすそうな軟弱な肩に、これまでにはなかったような責任が重くのしかかってくることも事実です。彼らに提示されているのは、悲劇的な現在から脱出するための積極的な方法と、科学と批判的精神が征服したものを救い出し、生きのびることを望んでいる社会と階級を正しく整理するための方法なのです。いずれにしても、それ独自の表現方法に集約される厳格で、しかも連続性をもった配慮がなくては無理なことなのです。

ヨーロッパの知識人やブルジョアにありがちな質<sup>たち</sup>の悪い習慣に従って、見せびらかしや気晴らし

のためにやるのではなく、知識人の集団独自の話し方と書き方を根底から改革すること、つまり、自由に利用できる知識の遺産を節度をもってコンスタントに活用することは、それだけでは十分とはいえないまでも、現代社会の言語的で文化的な生活を刷新するための一つの過程にとっては必要な条件なのです。このような過程がなければ、いくら科学的で批判的な知識や民主的な諸制度があっても、その前途には生命の危険が待ち伏せているのです。要するに、言語学は読みやすく解りやすい知識を広く普及するための基準を指摘できる立場にあるのです。